



確認された市町
キツネ2匹の行動が

愛知県半田市出身の児童文学作家・新美南吉の童話「ごんぎつね」の舞台として知られる同県の知多半島で、野生のキツネが大規模太陽光発電所(メガソーラー)をめぐらしていることが、日本福祉大の福田秀志教授(森林保護学)らの調査で分かった。全国的に確認されたことのないケースで、生息に適した雑木林などが減る中、福田教授はキツネを締め出すのではなく、人間と共存する方法を探るべきだと指摘している。(戸川祐馬)

行動を追跡したキツネ。GPS発信機付きの首輪がつけられている=2019年7月、愛知県阿久比町で(福田秀志教授提供)



知多半島のメガソーラー

ごん、おまえの家だったのか

野生キツネ生息域確認



①追跡したキツネがめぐらとして使っていた大規模太陽光発電所=愛知県阿久比町で ②キツネが共生できる大規模太陽光発電所の使い方を提案する福田秀志教授=名古屋市中央区

福田教授の研究室は、愛知九六〇年代までに絶滅した知県阿久比町で捕獲したオスのキツネ二匹に衛星利用測位システム(GPS)発信機付きの首輪をつけ、二〇一九年から一年一年半の長期にわたって、移動ルートと頻りに訪れる場所を探った。GPSでキツネの行動を追跡する調査は珍しいという。

知多半島ではキツネは一動するごとに、縄張りを抜

日福大調査 減る雑木林 共生模索を

福田教授は、キツネがめぐらとしていた雑木林などにメガソーラーが造られた後、「風雨をしのげる場所として、ソーラーパネルの下を好むようになったのではないかとみている。これまでのところ、メガソーラーの稼働に影響はないとみられる。

今後は、自然エネルギー普及のためメガソーラーの建設が進み、雑木林などがさらに失われる恐れも。福田教授は「共生する仕組みがあれば、生態系への負荷を軽減できる」と指摘し、配線などを保護した上で、ソーラーパネルの下をキツネが自由に動ける構造にすることを提案している。

調査をまとめた論文は、日本福祉大知多半島総合研究所が発行する機関誌「知多半島の歴史と現在」二十五巻で公表する。この地域では、産学官でいへる知多半島生態系ネットワーク協議会が「ごんぎつねと住める知多半島を創ろう」を合言葉に活動している。